
○議長（藤井 要君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前10時45分）

◇ 鈴木 茂孝 君

○議長（藤井 要君） 一般質問を続けます。

通告順位2番、鈴木茂孝 君。

（1番 鈴木 茂孝君 登壇）

○2番（鈴木茂孝君） 今世界で猛威を振るっているコロナウイルス、日本でも、この1、2週間が、今後の感染対策において、非常に重要であるということです。それに伴って、小中、そして高校が、休校の措置となりました。この措置は、突然ではありますが、子供だけが、家庭に取り残される、そういうことがないように、健康福祉課、教育委員会等が連携して、小さな町らしく、細かな対応をしていただけるよう、お願いいたします。

それでは、通告に従いまして、壇上より、一般質問をいたします。今回は、道の駅直売所について、駿河湾フェリーの松崎就航について、高校生の、通学費補助について、以上3点について伺います。

まず1点目の道の駅直売所についてです。直売所運営を含めた計画案が否決となり、直売の計画がストップとなりましたが、これをどのように受けとめているか。また、島根県邑南町での取り組みの紹介と、計画を立案するプロデューサーについてお尋ねします。

2点目は、駿河湾フェリーの松崎就航についてです。昨年12月3日の、知事の、定例会見で、駿河湾フェリーの松崎就航への、可能性が示されました。これについて、町は、どのようにお考えか、伺います。

3点目は、高校生での、通学費補助についてです。昨年6月の一般質問でも質問しましたが、その後、どのような検討がなされたか。また、松崎高校の魅力を高めていくために、町として、どのようなことを考えているのかについて伺います。

以上、壇上よりの一般質問を終わります。

（町長 長嶋精一君 登壇）

○町長（長嶋精一君） 鈴木議員の質問にお答えします。まず、大きな1つ目、道の駅直売所について、その内の1つ、指定管理者の直売所運営を含めた計画案が否決となり、直売所の工事費が計上されないことになったが、これをどのように受け止めているのか、という質問で

ございます。

お答えします。道の駅の整備につきましては、平成29年から議員をはじめ地元関係者、産業関係者、まちづくり団体、金融機関等で組織する道の駅パーク構想基本計画策定委員会で計画を策定するとともに、昨年からは道の駅整備運営ワーキンググループで直売所等について検討し、取りまとめてきたものでございます。

また、議員もご承知のとおり、基本計画策定や実施設計及び設計変更予算につきましても、議会の議決をいただき、これまで1,600万円余りをかけ、進めてまいりました。道の駅の整備につきましては、このような手順を踏んで進め、道の駅パーク構想基本計画策定委員、ワーキンググループ、農業委員会、行政調査委員会の皆さまには、道の駅整備の必要性につきましてご賛同いただいたところでございますが、議員にご理解いただけなかったことは、誠に残念に思います。

道の駅直売所の2つ目でございます。島根県邑南町では、町営のレストランを充実させて、町が賑わいを取り戻している、この取り組みを我が町でも、行ってはどうかという、質問でございます。

お答えします。島根県邑南町の「A級グルメのまちづくり」の取り組みは、全国的にも注目されていることは承知しております。邑南町は、豊かな食材と食文化、「耕すシェフ」による農業と料理人の育成制度、「食の学校」によるトップクラスのシェフによる特別講座などの積み重ねの中で「A級グルメのまちづくり」を展開してきたもので、そのまちづくりは一朝一夕でできたものではありません。

当然のことながら、地域の特性や産物などはそれぞれ違いがあり、邑南町の取り組みをそのまま松崎町に当てはめることはできません。道の駅花の三聖苑の食事については、季節、季節の地場の産物を使い、ここでしか味わえない食を提供するように努めてまいりたいと考えております。

道の駅直売所の3つ目でございます。実績のあるプロデューサーを置いて、一緒に構想から見直すことは考えないかという御質問でございます。

道の駅パーク構想は、道の駅と旧依田邸、那賀川周辺一帯を道の駅パークとして賑わいを創り出し、観光交流文化拠点として産業の振興、地域の活性化を図るため、町民の皆さんをはじめ県やアドバイザーの方々も関わり検討を重ね、まとめ上げてきたことは議員もご承知のことと思います。

そうした中で、道の駅への直売所の整備につきましては、住民所得の増加を図るととも

に、交流人口を増やし経済の地域内循環を生み出すために計画されたものでございます。運営面の細かな部分については、町内にも農業などに精通している方もおりますので、他から実績のあるプロデューサーを招いて道の駅パーク構想を見直すことは考えておりません。

大きな2つ目の質問です。駿河湾フェリーの松崎就航について、その1、駿河湾フェリーの松崎就航についてはどのような効果を期待しているのか、という御質問でございます。

お答えします。駿河湾フェリーは、昨年3月末で民間事業者の事業撤退を受け、4月以降、静岡県と3市3町、静岡市・伊豆市・下田市・南伊豆町・西伊豆町・松崎町で組織する一般社団法人ふじさん駿河湾フェリーを設立し、運航を継続してまいりました。

駿河湾フェリーの利用客の多くは観光客であり、伊豆西南地域における交流人口の拡大に寄与していることは明らかで、県が提示したフェリー事業の経済波及効果は21億円と見込んでおり、地域経済の活性化につながるものと考えております。

なお、駿河湾フェリーの松崎就航について、新聞報道で掲載されましたが、フェリーの寄港が具体化することとなれば、海上交通の利便性が向上し、伊豆半島西南地域への静岡県中西部、中京、甲信越からの観光客の増加などの観光振興が期待されます。

駿河湾フェリーの関係の2つ目の御質問で御質問でございます。地元として、積極的に進めるため、どのような事をしているか、ということでございます。

お答えします。駿河湾フェリーの運営は、静岡県と3市3町で連携して行っており、利用者を増やすための商品企画の造成や駿河湾フェリーの応援隊を結成し、地域が一丸となってフェリーを支える仕組みづくりを行っています。町としましても、フェリーの運航は重要な社会インフラとして考えており、今後も県と3市3町で協力し利用者の増加に努めてまいりたいと思います。

また、今回静岡県知事の発言は、松崎町へのフェリー寄港の追い風になると考えておりますが、一般社団法人ふじさん駿河湾フェリーの中では、まだ具体的な検討はされておられませんので、今後積極的に働きかけてまいります。

駿河湾フェリーの3つ目です。これは、伊豆南地域に最も大きなチャンスである。他市町と連携して、取り組んでいく考えはあるか、という御質問でございます。

お答えします。先ほどもお答えしたとおり、フェリーの松崎町への寄港が実現すれば、海上交通の利便性が向上し、伊豆半島西南地域への静岡県中西部、中京、甲信越からの観光客の増加などの観光振興が期待されます。現在、駿河湾フェリーの運営は、静岡県と3市3町で連携して取り組んでおりますが、駿河湾フェリーの松崎町への寄港は、3市3町のみなら

ず伊豆半島の市町においても経済効果は期待できますので、一般社団法人ふじさん駿河湾フェリーで検討してもらうことはもちろん、一般社団法人美しい伊豆創造センターとも連携して取り組んでまいりたいと思っております。

3つ目の質問は、教育長のほうからお答えいたします。

(教育長 佐藤みつほ君 登壇)

○教育長(佐藤みつほ君) 続いて、鈴木茂孝議員の質問にお答えします。まず、1点目、昨年6月の定例会で一般質問した高校生の通学補助について、その後、どのような検討がなされているか、町内の高校生が松崎高校に通うための通学補助についての考えはないか、という質問でございます。

回答いたします。6月に答弁させていただいたとおりで、通学の補助制度については、町内の生徒が松崎高校に通学する場合、自転車の割合が多いこと、また松崎高校通学者だけの通学費補助となると、一部の生徒だけという・・・補助となってしまうこともありまして、検討はしましたが、創設は考えておりません。松崎高校の存続を考える時に、連携型中高一貫校としてできるだけ多くの生徒に通っていただきたいなかで、保護者の負担軽減も高校選択の一つの要素になる可能性があります。現状では、高校の魅力化を最重要課題と考えております。

ご理解のほどよろしくお願いたします。質問③、松崎高校の生徒を増やすため、高校の魅力を上げていくために、どのようなことを考えていますかという質問です。

今現在、連携型中高一貫校として、西豆学を通して地域で学び、地元愛を育むことで魅力化を図ってまいりましたが、少子化による地域内の生徒数の減少が進んでおります。今の中学生だけでなくその保護者にとっても、行きたい、行かせてよかったと思える高校にするために、地域や大学との連携を図っており、その充実を検討しております。

また、県の所管ではありますが、松崎高校とも具体的に連携を進め、何ができるかを検討しております。

昨年には松崎高校OB会へも協力要請を行い、地域の総力を挙げて魅力化を図り、地域外からの生徒の受け入れ等も模索しているところでございます。

以上でございます。

○2番(鈴木茂孝君) 回答ありがとうございました。それでは、一問一答でお願いいたします。

○議長(藤井 要君) 許可します。

○2番(鈴木茂孝君) これですね、この文書ですけども、2月14日に、町からワーキンググ

ループの委員に出されました。この文書には、指定管理の案が否決されたということですか、町の見解、それから今後の方針というのが書いてあります。しかし、ワーキンググループの委員である、私のところには、配布がなかったという状況でございます。なぜ私にいただけなかったのか、御答弁ください。

○企画観光課長（高橋良延君） こちらは鈴木議員はワーキンググループの一員でいろいろと御尽力いただいたところでございます。議員のほうで、議会のほうで情報を提供しておりますので、それをもってということで解釈をさせていただきました。

○2番（鈴木茂孝君） この文書によりますと、直売所をつくることで、交流人口を増やしたい。そして、町民の収入を増やし、町内でお金が回る循環をつくりたい。という理由がありました。これには、私も全く同意見であり、道の駅の改修には、これからの松崎町の未来を考える上で、非常に、重要であるというふうに考えております。

そして私の意見を述べる前に、先ほどの御答弁で、残念に思うという御答弁がありました。が、なぜ、この案が、私たちに受け入れはなかったのか、この原因について、お伺いしたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） 我々のほうは既にこのとおり、29年から、手順を踏んで、皆さんの意見を聞きながら進めてきたという経過がございます。ただ、それで今回、議会のほうでああいった議案のほうで否決されたら、そういう意見では、事業計画だとか、収支計画はまだまだ不完全じゃないかというような、御意見であったと思います。

我々としては事業計画収支計画についても、そこは詰めてきたつもりでおります。そのところはじゃあ、どういう考えの違いなのかというのは、それはわかりません。ただ、今の現在の事業計画、収支計画についても、我々、今のところで十分練ってきてやってきたと思います。決して100%、今、事業計画を求めるのかどうかという御意見はあるかと思っておりますけれども、まだまだ、この1年の中で、我々は細かい部分については詰めていく、そういったことも申し上げておりました。それは開業までに十分準備する時間もあるという判断でおりました。

○2番（鈴木茂孝君） それではですね、私がなぜ工事をとどめるべきというふうに考えたか、その理由について、述べたいと思います。

その理由は、3点あります。1点目です。1点目は、明確な構想がないまま、工事にかかろうとしているということです。どのような構想をもって、年間8万5,000人、1日にすれば230人、これを直売所に呼んで、町を活性化させようとしているのか、お答えいただけます

か。

○企画観光課長（高橋良延君） 明確な構想がないと申しましたけれども、道の駅のパーク構想のところでは道の駅、依田邸、あるいは中川の周辺を含めたところで賑わいを作り出そうということでございます。その点で交流人口を増やす、あるいは住民所得を増やす、産業の振興、歴史文化発信の場という目的、この3点を掲げて、この道の駅の整備、旧依田邸の整備をやってきたということです。

それで、明確な構想という中では、道の駅については、今現在のところだと、5万人ぐらいのところでは頭打ちのところでございます。そこに新たに、松崎のもの、地場産品、含めてですね、そういった施設を加えて、地場産品の直売、加工品の販売、あと食ですね、この3点を、いわゆるあそこの道の駅のところに集約して、交流人口を増やしていきたいという計画でございました。

○2番（鈴木茂孝君） ありがとうございます。1日230人と言いますよね。観光バス6台分ぐらいなんです。それが毎日あそこに来るという計算ですけども、やはりこれはですね、かなり綿密な計画を練らないと、そのように、来ることは、なかなか難しいんじゃないかというふうに私は思っております。

そして、その計画にあった建物というものがございまして、やはり綿密な計画の中にはその建物がどのように機能するかということも非常に重要と思ひまして、その辺がちょっと欠けてるんじゃないかというようなことで、私は反対をいたしております。

そして、松崎町や、姉妹都市の品物を、ですね、並べただけでは、町の中心地からの距離がある、三聖苑まで、多くのお客さんを呼ぶのは非常に難しいというふうに思います。これが、ですね、ほかの直売所全く無い状態で、町長が言われたように、20年前私が来た時に、ここには必要だと、思ったというふうにおっしゃられていますけども、20年前と今では全然、状況が変わってしまっていて、今直売所が既に2軒、松崎にはありますので、同じことを、三聖苑にやったからといって、お客さんが来るかというところでは、そこが、そこには綿密な計画を練らないと来ませんよ、というふうに私は指摘したいと思います。

先日ですね、町の開催した、直売所で、直売所の講習会がありました。講演者の青木さんは、ターゲットをはっきりさせることが重要というふうにおっしゃっていました。町長は、ターゲットを、町民主体でやっていきたいというふうにおっしゃっていました。同時に、交流人口の増加が狙いとも言われます。この施設の、主な想定しているターゲットは、町民なのか。観光客なのか。再度、お考えをお聞かせください。

○町長（長嶋精一君） もう、何回も申し上げました。ターゲットという言葉は・・・、というよりも、主のお取引先っていうか、主に来ていただけるお客さんは、あくまでも、松崎町民、そして近隣市町の人たちに来ていただきたいと思います。近隣市町のお客様、それと、町のお客様が来ていただいて、賑わえば、当然観光客の方は、来ていただけると私は思っています。その反対は、そういう・・・、その・・・、道の駅としては余り成功していないんじゃないかと私は思います。

そして、鈴木議員は、ワーキンググループの委員として、8回、これをどうしたらいいか、ああしたらいいかと、いうことで、議論を皆さん方でしていただいた仲間でございます。したがって、最終的には否決されたわけですが、そのワーキンググループの委員の中で、議論の中で、そういう考え方が余り示さなかったというのは、非常にいかななものかなというふうに思います。

これについては、もう、1,600万円のお金を投じておるわけです。1,600万円のお金を投じています、議員さんの仕事の1つは、税金の無駄遣いがないかということ、我々、町に対してチェックをするのも大きな仕事になっているわけでございます。1,600万というのは、税金でございます。大切なお金です。非常にそういう意味で、残念だなというふうに思った次第でございます。

○統括課長（高木和彦君） 今回の町長のやつに、意見に補足させていただくんですけども、この事業は、県のほうともいろいろ協議をしてきたわけです。県のほうで補助金をつけるとか、過疎債について認めるということは、県民にとっても、投資効果がある事業ということが認められた事業でございます。それを今回、鈴木議員の御意見ですと、まだちょっと欠けている、ですとか、また私は、何万人来ると思わないとか、そういう、鈴木議員のほうでも、十分な代替案がない中で、反対されて・・・、我々ですね、あれから1カ月の間、行政調査委員会の方に、お詫び、また経過説明、ワーキンググループの皆様へのお詫びですとか、県の補助金担当者の方のところに行ってお詫びですとか、ですね、そういうことをしてまいりました。

またですね、僕らのほうもこれから1カ月しか経っていませんので、それを今後どうしようというのは、今お話できませんけども、鈴木議員のほうも、ですね、いろんな立場があって御反対したんですしたらね、今度はどういうふうに、具体的にある程度の案を出す、ですとか、我々が今、直面してる、1,600万円の、損失補填をどうするかということについても、ですね、いろいろ、相談させていただきたいなというふうに思っています。

○2番（鈴木茂孝君） 税金の無駄遣いというのは、やはり議員のチェック機能として、大きな所だと、私も思っております。ただですね、この道の駅の、建物ですね、これから20年30年、ずっと松崎町のシンボルとしてやっていくものです。たとえここで、1,600万円がもし無駄になろうとも、やはり、後でよかったねと、逆に、あそこやらなくて良かったねと思えるような物をつくる、そういうものが私たち議員の提案力であり、努めだというふうに思っております。

そして、今回ですね、この後質問しますが、島根県の取り組みですね、このような形はどうでしょうかというような提案を、私は今回させていただきますので、後で、聞いていただきたいというふうに思っております。

先ほど町長の御答弁でありましたけれども、町民とその近隣の方々が、主なターゲットということなんですけども、それはもちろんそうなんですけども、今後、町内の人口は減少してきます。もちろん町民の購買力というものが低下していきます。それは、松崎町だけでなく近隣市町も同じことです。私は、観光客の方を呼び込んで、町内のものを購入していただいて、そして、外から町にお金流れ込むようにしていく。そうしなければ、今後、地域経済は、どんどんどんどん縮小していく。そのように思っております。

ですので、あくまでも、観光客をターゲットでいくという形が正しいんじゃないかなというふうに思っておりますので、これからの提案をさせていただきたいと思っております。

反対した2点目です。意見の2点目ですけども、人件費についてです。現在の計画では、振興公社の職員が本部の仕事と兼務で直売所の店長をすると、忙しくなれば、振興公社職員が手伝うというふうな計画になっております。

つまり、給料は、そのまま、仕事だけが増えるというふうな状況です。店長が兼務で良い直売所ができるのでしょうか。これについて、この直売所のアドバイザーである南伊豆湯の花の売店を立ち上げた吉田さんに聞いたことがあるのでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） おっしゃるとおりですね、新しい施設ということですので、そこのマネジメント、責任を持つという・・・、店長ですね、この立場は重要だということは重々承知しております。その上で振興公社の本部の職員、こちらを兼務で充ててということですので、全然その店長を、ですね、兼務だから、50%の仕事しかやらない云々ということではなくて、当然、この先、研修にも行きながらですね、ノウハウを学んでいただいて、その店、直売所を運営できるよう、これはしてまいります。それは私も既に言っているところであると思っております。

いわゆる、吉田さんについてもアドバイザー、やはり店長というのは非常に重要だということは吉田さんも言っております。そういった中で我々のところに来て、そういったノウハウを教えるよというようなことも言っていただいておりますので、そこが公社本部職員であろうが誰であろうが・・・、本部の職員を充てますけれども、そういったノウハウを学んでもらいたいと思っています。

○2番（鈴木茂孝君） 私ですね、吉田さんから直接その話を伺っております、兼務は不可能であるというふうに町長にもお伝えしてあるというふうな回答をいただいております。私もその直売所には行きますけれども、やはり店長は、かなり忙しい、いつも忙しくしております。例えば、野菜が午前中に無くなればすぐにメールが来まして、この野菜とこの野菜がないですよ。出荷してほしいです。すぐに行きます。そのような対応が、兼務で果たしてできるかどうかということは、非常に疑問ということも考えております。

また、この計画では、レストラン天城山房の人員を2名ということで、忙しくなれば2.5名対応でやりますよということで、おりますけれども、今実際に天城山房で、何人の方が、厨房で働いていらっしゃるか、御存じでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） 天城山房は、今現在2から3人のところの中で運営しております。

○2番（鈴木茂孝君） 現場にお聞きした答えでしょうか。それは・・・。

○企画観光課長（高橋良延君） 振興公社の事務局のほうから伺っております。

○2番（鈴木茂孝君） 私ですね、事務局ではなくて、直接、天城山房のほうに伺いまして、しかも、何回かにわけて、人も変えて伺っておりますが、3、4名でやっておるということで、なかなか2名ではどうですかという話をしましたら、それはとても無理です、というお話でした。

計画では、さらに席数も増えます。メニューも増えます。その中で、本当にできるのかと。この計画で本当にできるかと、というふうに思っております。そしてさらに、統括ですけども、統括は、第1回臨時会で、このように述べています。振興公社に、委託するので、内部で検討していただいて、ベストな形で運営してもらいたいというふうにおっしゃっています。想定収支案に2名で人件費を計上しておいて、今度は振興公社の中で考えてほしいというのは、ずいぶん無責任な話だと思うんですけども、それについていかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） 今現在ですね、2から3ということは公社の事務局で伺っています。今の形態は、いわゆる、我々が今度整備するのは、券売機セルフスタイルという形

での提供という形に今度するものですから、そのところで今の人件費より抑えられるだろうという形で考えておりました。

それで、今現在のところは、もうそういったスタイルじゃないもんですから、注文聞きに行って、対応しなければならないという中で、人数はかけなきゃならないというスタイルになってきているわけです。それを少しでもずっと変えていくということで我々提案したということでございます。

○統括課長（高木和彦君） それと、ちょっと今手元に資料がないですけども、この間話をした時には、労務費につきましては間接労務費、直接労務費ということがありまして、そして、総支配人的な、職員については、そちらのほうにのせなくても、計上する経費の上では問題ないじゃないかというような話も出ました。私どもは、これは町が管理運営できないから振興公社のほうに委託するのであって、その判断っていうのは、やはり、振興公社のほうで煮詰めてもらいたい。また、あの、さっき説明がありましたけども、券売機の導入ですか、そういう形で、ですね、人員なんかも削減して、より良い運営をするためにですね、振興公社にいろいろ練っていただきたいという趣旨で発言したものでございます。

○町長（長嶋精一君） 鈴木委員の質問、発言は、道の駅直売所を、賛成しなかったという自分の正当性を声高に言ってるように聞こえます。元々ですね、この道の駅パーク構想というのは、道の駅が、もう10年以上赤字なんですよ。ずっと赤字っていうことは、税金が投入されているということなんです。これをね、何とかこの出血を食い止めなければいけないということが発端で、2年半前から、道の駅パーク構想というものは練り上げられたんです。

それを私が町長になって継承したわけですけどもね。もともとの原点を忘れないでいただきたいんですよ。じゃあ、このままいったらどうなるのかと、そしてですね、計画というのは、100%の計画というものはありません。民間企業でも、どこでも、計画どおりにいかなから、倒産があるわけです。

よいですか、計画どおり100%の計画をやろうと・・・、やったという人は、私は思い上がりだと思います。70%の・・・、70%を積み上げていって、もし足りないところがあったならば運営していく中で、1年たって2年たって修正すればいいことじゃないかと私は思うわけがあります。そして、鈴木議員はワーキングのメンバーだったんですね。そういうことをですね、8回の議論の中で、もっともっと、その・・・、言って欲しかった。そういう議論ができる中で、言って欲しかった。いきなり、その・・・、最終的に、反対ということは非常に僕は残念だと、繰り返し申し上げたいと思います。

○2番（鈴木茂孝君） まず、券売機の件でございますが、券売機のほうも、私はお店に行って聞きまして・・・、券売機があるから、2名で大丈夫ですか。というふうに言っていますが、という話をしましたが、券売機があるからといって、人員削減には直接はつながらないんじゃないかとふうなお話でした。

それからですね、計画は70%でいいという話ですけれども、であれば、ですね、8万5,000人を想定しているのであれば、その7割の、5万人、6、7万人を、想定した上での収支計画というのが本当じゃないかなというふうに思うんですけれども、それも8万5,000人という事で計上していらっしゃって、後から70%あればいいんだということであれば、その想定収支はどうなんですかという話になるというふうに思います。

それからですね、1つちょっとあれですけども、依田邸の温泉施設が3万4,000人というふうにおっしゃっていますが、これも8万5,000人というふうにおっしゃったということは3万4,000人、オープンしてから来るということにつながっていますけれども、それはそのような認識でよろしいですか。

○企画観光課長（高橋良延君） まずですね初めに券売機の関係で職員がどうのこうのということでありましたけれども、これは今現在まだ券売機、そういった扱い方とかですね、そういったものが具体的にまだイメージが湧いていないと思うんですよ。具体的にこここのところは券売機が入れば、かなりそれは労力の削減、手間を省く・・・、あれなと思います。そういったことが1点。

それから、想定収支は8万5,000人ということであります。これは、当然目標ですからね、ここは忘れないでもらいたいです。8万5,000人必ず行くと、これは、我々そういうふうに目標を立ててやるということですので8万5,000人を確保するようにやっていくというようなことありますので、これが結果的に、じゃあ、7万人になった、あるいは9万10万人になったという・・・。それは結果です。ですからその結果を踏まえて、じゃあ、どうしていくかというようなことを、また考えるのが、その経営の中の1つのやり方であろうかなと思います。

3万4,000人の依田邸のところについては、ある程度、かじかの湯の実績等々、過去の10年のトレンドを見てということであります。一般の町内のお客様についても、同じ料金でということがかじかの湯は設定いたしておりますので、ある程度町民の方の利用、それも見込めるということで考えております。

○2番（鈴木茂孝君） わかりました。ちょっと時間がなくなってきましたのでちょっと締めた

と思いますが、この計画自体、きちっと人員を確保して、当初は赤字でもいいから、だんだんと黒字にしていくという、そういうような計画書が、現実的で着実というふうに思います。

3点目ですけども、島根県の邑南町という町がありまして、先ほど紹介されましたように・・・、そういう町ですが、人口1万500人ほどで、高齢化率は44.2%、松崎町とほぼ変わりません。

しかしこの町に今、移住者であったり、一度ほかの地域出た人がまた帰ってきているということが起こっております。この仕掛け人の寺本さんという方に伺いましたけれども、やはりレストランをきっかけにして、そのレストランに提供する農家の方が頑張ったりとか、そういうことが増えてきて、そして、そこでなんか賑わっていることをやっているということで、他の人たちが移住したり、先ほど言われましたように耕すシェフ制度っていうもので、他の人が移住してきたりということで、どんどんどんどん活発化してるということです。

そして、彼はですね、本当においしいもの。ここでしか食べられないものを作れば、全国から人が来てくれるというふうにおっしゃっております。議員視察で訪れた、群馬県の川場村、ここもレストラン中心で、多くの人を呼んでいます。ここはですね、過疎指定をされていますが、それが解除されるという程、人口が増えております。

このような仕組みを、松崎町も、丸々真似るんじゃなくて、その仕組みを真似ていくということをやっていくのが、これから道の駅が、大きな発展をすると、そして松崎町を代表する施設になることが非常に大事なことじゃないかなというふうに思います。

そして、それにはですねやはりプロデューサーというか、全てのことを取り仕切る、そして農家の調整、経営との調整、そして、集客ですね、集客をどうしたらいいんだろうということと一緒に考えてくれるプロのプロデューサー、農家のプロはもちろん松崎町にもいらっしゃいますし、経営の人もありますけれども、直売所の経営や集客に対して、そういうふうな専門家を持ったほうが、より良いんじゃないかというようなことです。それについていかがでしょうか。

○統括課長（高木和彦君） 例えば、まつぎき荘の料理をよくして、お客様を呼ぼうとかっていう提案でしたら、そういうこともあるかもしれませんが、そもそも道の駅というのは、昼食等で、ですね、安くて早くておいしくてっていうのが1番の人気・・・、それにプラスですね、松崎らしいものということを考えれば、ですね、どこどこ町で、良いレストランがあるからそれを参考にしたらどうかというのは、ちょっと、的外れじゃないかなという

ふうに感じますがいかがでしょうか。

- 2番（鈴木茂孝君） 松崎の場所というのは、例えばこの前、月ヶ瀬がオープンしましたが、あそこのように黙っても人が来るというようなところでは、ございませんので、やはり、わざわざ松崎町に行こうと、あそこの道の駅のレストランに行こうというふうにしてもらわないと、人が来ないというふうに考えております。

それでは次の、駿河湾フェリーのほうに行きたいと思えます。

これですね、確かにいろんな効果がありまして、お客様がみえますし、そして、来年3月には、山梨や信州とつながる中部横断道もできるということで、あちらのほうからもお客様がみえるということも聞きます。そして、この新港湾は防災港ということでして、災害時には、人や物資を運ぶことができる。そして、例えば1時間で静岡市に行けるようなことになれば、人の往来も激しくなった上で、移住定住や、松崎での就業、企業にも繋がるのではないかと。それからこれがちょっと大事なことなんです、子供ですね、多くの子たちは、高校を卒業したら、外にいきたいというふうに言って外へ出ていってしまうということがあります、気軽に静岡市に行けるということになりますと、都会に近いというか、そういう感覚がありまして、むやみに都会に出たよと言わないで、逆に松崎で、都会よりも落ち着いていて良い所だねということで、松崎に、そのまま居て下さるということも起きるじゃないかというふうには私は期待しています。

それから、地元ですね、地元として積極的に進めていくためには、商工会ですとかいろんな農業振興会、観光協会などと、やっていくということですが、実際にその知事の発言があった後で、というような働きかけがあったのか、教えていただきたいと思えます。

- 企画観光課長（高橋良延君） 知事の発言があった以降ですね特に町のほうに、県のほうから具体的な、こうしたいんだけどっていうことはありません。今、ですから、それは、今、一般社団法人の中でも、まだ具体的に話はされていませぬので、今後、具体的にそういった話が出てきたら、町として、どういう体制を組むのかを含めて、それは、検討してまいるといふこととございませぬ。

- 2番（鈴木茂孝君） 先ほど言われたようにこのフェリーが就航すれば、かなりの効果があるということは見込めるわけにして、例えばその知事が、例えば富士山フェリー社団法人ですか、あそこは・・・、ちょっと、これは、先走っているのかな、と思ったことも、でもですね、こちらのほうから、やる気を見せてどんどんどんどんお願いしますというふうにしていく姿勢が必要と思えますけれども、町長はこの知事の案に、発言のあった後に、向こうの

ほうにあって、ぜひお願いします、というようなことをやったことはありますか。

○町長（長嶋精一君） 当然、すぐに行きまして、知事に、非常に良い提案でございますので、是非やってくださいというふうにお願いしました。知事は、長嶋町長、この話は、僕は1番最初に言ったんだからね、というふうに答えてくれました。

そして、担当する方は、難波副知事です。その方とも、話し合いをしております。県庁へ出向いて、やっております。その点は、ぬかりなくやっておりますので、また御協力のほどお願いいたします。

○2番（鈴木茂孝君） ありがとうございます。ぜひこの件進めていただきたいと思っております。ちなみにですね、新聞に、ですね、今年度中に、フェリーの松崎新港への接岸実験があるというふうに、報道されていますけども、これについては何か聞いておりますか。

○企画観光課長（高橋良延君） 本年度松崎新港へのフェリーの接岸の実証実験を行いたいという話は、県のほうからもありますけれども具体的な、今、現在、何日にやるとか・・・、そういった連絡はございません。これが決まれば、ですね、県のほうで直ちに公表されるものと思います。

○2番（鈴木茂孝君） これは言って良いのかわかりませんが、実は内々に私のところにはもう既に、情報が来ておまして、やるということで日にちもありますので、ちょっと情報が遅いのかなという形がありますので、その辺はは情報収集もしっかりとした上で、ぜひ、実現へと向けていただきたいというふうに思います。

次ですね、高校生の通学補助なんですけども、確かに今年の、松崎高校80人募集で76名、去年は71名ということで、昨年よりは上回ったんですけれども、やはり定員割れをしているということで、なかなか厳しい、確かに通学補助で、ほかの地域へ行かれると松崎高校の存続がちょっと・・・、っていうのは理解できるというところですよ。

ではですね、町内の方、町内の高校生が、松崎高校に行く場合にバスや自家用車で行くと思うんですけども、この辺の補助についてはどういうふうにお考えでしょうか。

○教育委員会事務局長（深澤準弥君） 今、御指摘のことですけれども、先ほど教育長のほうからお話があったのですが、松崎高校、選んでもらう1つの方策として、そういった町内から松崎高校へ通う・・・、遠距離ですね、バスとか自動車で行かなければならない距離の方について、補助というのは、これから考えなきゃいけないと思っています。

ただ、自転車通学の方も、徒歩の方もいる中で、いろいろ総合的に考えなければならないと思っておりますので、簡単にバスだけっていうことにはならないと考えておりますので、

いろいろ検討はしますし、松崎高校これから対象となる、子供たち、中学生が、ですね、減って行くのは、もう、数字的にはっきりとわかっております。ですので、その部分で、総合的に、地域と、高校と、松崎と、高校については県立なんですけれども、松崎、地元にあるということで、いろんな方策を積極的に協議しながら、高校のほうにも働きかけをさせていただきながら、やっていきたいと思っております。

実際に今検討・・・、一応、テーブルの上には乗せる方向で考えておりますので、御了承ください。

○議長（藤井 要君） 鈴木君、時間・・・。

○2番（鈴木茂孝君） 延長をお願いします。

○議長（藤井 要君） 5分延長します。

○2番（鈴木茂孝君） 例えばですね、中学校の遠距離通学補助もありますけども、これは自転車通学者には月千円とか、バス代には定期代補助とか、自家用車にはガソリン代の支給ということもあります。

バスの定期運賃などは三浦地区の雲見とか、池代でも3万円を超えてしまうということで、非常に父兄にとっては大きな負担というふうになっておりますので、そんなに人数はね・・・、いないということなので、バスだけということにはいかないというようにおっしゃいましたけれども、とりあえずそこは、毎月お金が出ていくということです。自転車は1回買ってしまえば、そんなにお金は出ない、ということもありますので、その辺だけを集中的に考えてもらうとか・・・。ガソリン代が出ていくところ、バス代定期代の出るところだけをちょっと集中的に見てもらおうということも、速やかにやっていく上では、大事じゃないかなというふうに思いますので、その辺もお願いいたします。

それからですね松崎高校の魅力化ということなんですけれども、先日、下田で賀茂地域大学交流拠点施設、賀茂キャンパスっていうのが、開校されました。賀茂地区には多くの大学生が遊びに・・・、学びに来ております。

このキャンパスの目的の1つに、それぞれの大学、市民活動団体、高校などとの交流を促進するというような目的もあります。私たちの地域には、大学がございません。大学生の交流、そして、共同研究、っていうものは、高校生にとって非常に貴重な体験になると思います。これを松崎町としても、積極的に進めていく、そういう考えはありますか。

これは町長にお願いいたします。

○町長（長嶋精一君） 町長、答弁できますか・・・。

○教育長（佐藤みつほ君） いつもありがとうございます。2日の日に、松崎高校の卒業式に行きまわりました。今のウイルスの関係で、幼小中高と卒業生のみ、それから保護者、それから、来賓も町長、私、それから議長・・・、****けれども、来賓もすごく少なくなった状態で、行いましたけれども、とにかく感動したというか、高校生らしい、しかも、進路に向け、70、目標は少ないんですけども、70と考えていました、はじめ。というのは、いろいろなところから来ていること、それから、下高や稲取高校の関係で、初め人数が、とても少ない、事実がありました。その中で、私たちは・・・、私や、局長を中心にしながら、OB会とか、それから後援会とか、あるいはそういうところに回りながらも、松高のPRっていうんですかね・・・、ぜひお願いしたい、存続をお願いしたいというような挨拶回りもさせていただきました。

あるいは、教育長会では、南伊豆の教育長さんや、あるいは下田市、いろいろところに声をかけ、松崎高校のPRもさせていただきながら・・・、しました。例年10名のところ、地域外からは、17名ほど来てくれるようなことがあったり・・・。それから、中高で進めている進路指導の中でも、大変人数が増えてきたということがあって、76になって、確かに存続、ずっと考えると、とても、不安もあるし、期待もあるし、夢もありますけれども、妥当な線を行っているのかなというところの中で、今、静大や・・・、それから、常葉とか、それから早稲田とか、いろいろなところの高校との連携を図りながら、中学校では、進路指導を高校、大学生と一緒にやりながら、進路のあり方をお互いに関わることによって、次の進路を決定している。高校もそういう活動をたくさんしています。

先ほど申しましたように、とにかく行って良かったな・・・。行かせて良かったなという大きな目標を掲げながら、いるところ、子供たちの様子を見たときに、PTAの新聞等にも載っていましたが、ほとんどの生徒が、ある程度満足しているのかな、っていうような状況で進めています。

そんなところで、やはり、中高の横の関係、縦の関係、それから地域との周りの関係、そこら辺を、とにかく力を入れながら、子供たちが、本当に喜んで夢や希望を大きく持って、いずれは、ここに帰ってくる。始め希望としては、やはり、外に出てみたい、アンケートの結果は、そういうことがすごく多いんです。それは、まあ、事実の記録としてそうあるわけですけども、やがてはそういうことが本当に幼少中、あるいは高の中で身につけていると、またここに帰ってきて、何か町のためにやってみたいとか、皆で頑張りたいっていうような意欲が、この間の卒業式から感じられました。

○町長（長嶋精一君） これからの総合計画の中でね、人口減少をくい止めるというよりも、なだらかな減少にしたいという施策は出てるわけです。国からね。その中で、関係人口ということが初めて出ました。それは要するに今、議員がおっしゃったような、大学との協定、これが非常に関係人口に関わってくると私は思います。

今までやってきたことは、松崎町はもう既にやっているんですが、常葉大学さんとは、棚田でもって、かなり細かい、しかも汗かき仕事をしっかりやっていただいております。そういう面では彼ら彼女らが卒業しても、棚田に貢献をしてくると思います。

それから静岡大学それと静岡県立大学、この前議員も一緒に行きましたよね。ああいう形でね、学校の生徒、松高の生徒非常に有意義になると思いますから、これ積極的にやっていきたいというように思います。

○2番（鈴木茂孝君） ちょっと、時間がアレですけど・・・、それで、詳しくお話を伺いますと、大学生が活動するに際して、交通費はしょうがないということですけど、宿泊費をなんとかして欲しいというようなことが、課題として上がっております。

当町には山田邸というのがございますので、山田邸を夏の間はライフセーバーさんが使うということですが、宿泊場所として、営業するということは、お考えいただけないかと思って、お聞きしますけど・・・。

○企画観光課長（高橋良延君） 今現在も早稲田とか静大、そういったフィールドワークについては山田邸を使っているということもございますので、そこに限らず、山田邸を使ってもらうような形で、これは周知してまいりたいと思います。

○2番（鈴木茂孝君） 是非ね、未来の子供たちのためにも、積極的に進めていってほしいというふうに思います。お時間来ましたので、以上で私の一般質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（藤井 要君） 以上で鈴木茂孝君の一般質問を終わります。

午後1時まで休憩いたします。

（午前11時41分）